

現代解釈学における弁証法の地平

——ガダマーのプラトン解釈と弁証法的思考——

発表者：小平健太 KODAIRA Kenta

コメンテーター：齋藤元紀（高千穂大学人間科学部教授）

司会：佐々木一也

0. はじめに

ガダマー（Hans-Georg, Gadamer, 1900-2002）にとって「歴史」とは、時間の経過によって降り積もった単なる過去の堆積ではない。主著である『真理と方法』において体現される〈哲学的解釈学〉という立場は、テキストを通じて出会われるさまざまな思想的立場の単線的な遡行によって構成されるのでなければ、それを過去の死せる痕跡として現在へと蘇生させることによって成り立つのではない。ガダマーの立場は、常に（そして既に）動きつつある現在と過去との絶えざる相互的な影響関係の只中で、過去と共に生起する〈作用史〉的意識にどこまでも貫かれている。ガダマーの言葉を借りて言うならば、時代および思想の由来を隔てたいくつもの哲学的地平が〈融合〉することで、さらなる大きな地平の形成へと参与し、そうして自らの地平の絶え間ない拡張を経て生成する思索の場こそが、彼の〈哲学的解釈学〉の立場である。こうした立場のもと、ガダマーにとって歴史ならびに「伝統」とは、認識の客観性が損なわれ、解釈の妥当性が阻害されるような時間的な断絶ではなく、そこにおいてはじめて認識や解釈が可能となるような、経験の可能性の条件なのである。むしろ、こうした時間的な〈隔たり〉なくしては、過去と現在の緊張関係の内に遂行される認識の思弁的運動性は確保され得ず、その裂け目から現出する〈真理〉も決して開示され得ない。

こうした過去の〈解釈〉によって、伝統・歴史を思想的な創造の場とするガダマーの読解作業は、自らの思考形成と分かち難く結び

つくことで単なる表層的な歴史的解釈の枠を越え出て、それ自体、真正な哲学的営みの様相を呈している。その始原は、プラトンの哲学的解釈まで遡る。就学時代の最後を飾るピレボスのプラトンの対話の研究（Gadamer [1931] 1999: 3-163）をはじめとし¹、彼のギリシャ哲学の理解に対する膨大な貢献は（Henrich et al. eds. 1960）²、ドイツにおける彼のヘレニズム研究者、および人文学者としての地位を確立させると同時に、文献学的研究と哲学的な問いの探究との緊密な一体性を通じて、後に結実する哲学的解釈学の理念へと通じていくものであった。一方で伝統に依拠することの意義を明確に方法として自覚しつつ、その方法を哲学的問題として主題化して語るとともに、他方でその語りそのものが既にして方法に依拠するという、解釈の循環的位相を動くことで体现されるガダマーの伝統依拠の立場は、その徹底さという点では師であるハイデガーをもはるかに凌ぐ（佐々木 2008: 169）。〈現在〉に立脚することに対する深い反省的意識に貫かれながら、西洋の思想的伝統の内部を運動することによって遂行されるテキストとの対話は、ガダマーにとってそれ自体、哲学なのである。

こうした伝統や解釈に対する態度は、主著である『真理と方法』において、理解ならびに解釈の理論、および人間存在の有限性と歴史性をめぐる存在論的・解釈学的考察を通じて詳細に分析され、理論的な根拠が与えられている。そこでは、人間存在を時間的・歴史的存在として理解するハイデガー的な存在理解に徹底して貫かれながら、芸術の経験、歴史の経験、そして哲学の経験において我々と真理とを架橋する言語の思弁的構造が究明されている。そこで本発表では、こうした真理を開示する弁証法的思考がいかに関成され、ガダマーの解釈学思想の地平の一部を構成するのか、この点を考察したいと思う。『真理と方法』におけるそうした理論化の下地がいかに関成されてきたのか——この点をガダマーのプラトン解釈に即して究明することが、本発表の目的である。

1. ガダマーのプラトン解釈——プラトン・ソクラテスの〈対話〉と弁証法的倫理学

『真理と方法』（1960）の刊行によってハイデガーの存在論哲学を

引き継ぎ、〈哲学的解釈学〉という名称のもと20世紀思想の牽引役の一人を務めることになったガダマーにとって、「弁証法」という問題は、彼の思考の最初期の段階より切実に問われていた事柄であった。というのも、こうしたガダマーの関心は、ヤスパースの後任として招聘されたハイデルベルク大学において、これまでの研究の総決算として完成を見ることとなった『真理と方法』をはるかに遡り、彼が哲学を志したマールブルク大学における修学時代に端を発するものだからである。ヘーゲルの弁証法哲学に対する関心に加え（Gadamer 1971: 5）³、プラトン哲学に寄せていた若きガダマーのただならぬ関心は、哲学的思考と文献学的思考の緊密な一体性のもと、一貫して彼の思想形成を支配してきたものである⁴。かつてハイデガーが『アリストテレスの現象学的解釈』の序文「解釈学的状況の提示」（Heidegger [1922] 2003）において示していた探究の道を⁵、プラトンを相手取って遂行するかの如く、ガダマーはみずからの教授資格論文『プラトンの弁証法的倫理学——ピレボスの現象学的解釈』（1931）⁶において、卓越したプラトンの哲学的解釈を展開し、文学的形式としての〈対話（篇）〉（Dialog）の哲学的意義、および学問（倫理学）の弁証法的な深層構造を現象学を手引きとして取り出すことを試みている。ハイデガーの理解に従い、「自らを示すこと」を意味する「現象」^{フアイノメノン}（φαινόμενον）と、それを「それ自体から示すこと」としての「学」^{ロゴス}（λόγος）という現象学の理念のもと（Heidegger [1927] 2001: 43ff.）、ガダマーはプラトンの思索の内に「現象」ないしは「現出」する知の原初的経験へと探究を進めていく。

この『ピレボス解釈』をはじめとし、〈対話篇〉の哲学的意義の探究は、ガダマーによるプラトン解釈を通底して規定しているモチーフであった。というのも、テキスト解釈をテキストとの〈対話〉として理解し、さらにはそれをロゴスそのものの経験として把握するガダマーにとって、プラトンの哲学的解釈とは、プラトンの思想が〈対話篇〉として、つまり「間接的伝承」（indirekte Überlieferung）として持っている意義の解明と常に不可分の関係にあったからである⁷。ガダマーは、一般的な文学形式に対して間接的伝承としての対話篇がもつ優位性を「[文字的・文学的に（literarisch）形づくられた]対話篇が語りからなるひとつの独自の全体である」（Gadamer [1968] 1985: 132）という点に認めている。間接的伝承の優位性が解釈学的

な問題としてガダマーの関心を惹くのは、この全体が一貫して〈対話〉によって構成されるがゆえに、それが〈未決の全体〉として、解釈に対して常に開かれた全体だからである。ガダマーが見る限り、対話形式に特有なその「完結し得ない未決性（Offenheit）」とは、プラトンの哲学的解釈にあつては、その体系的評価の不可能性として否定的に帰結されるものでなければ、プラトンの教義のいかなる固定化としても帰結され得ない（Gadamer [1968] 1985: 130）。むしろ、そうした解釈の固定化に背き、対話形式であるが故に残された解釈の未決性こそが、対話篇がもつ解釈学上の優位性を構成する。このような理解に基づき、『ピレボス解釈』もまた、こうした未決性の内に哲学的解釈の道を歩むものでなければならない。

対話篇を「ひとつの全体」と見なすガダマーの理解の力点は、まさにこの点に置かれていると言って良い。このようなガダマーのプラトン解釈の立場にとって、プラトン思想の理解の眼目は、対話篇という仕方でプラトンによって言表されている表層上の内容ではなく、言表そのものの内的空間において相互に浸透し合うことで開かれる言葉、すなわちロゴスの運動を看取することにある（Cesare 2000: 106）。このことをさらに換言するならば、交わされる言表の内的空間に留まることで、ロゴスの運動そのものを共に経験することにある。自らをひとつの「全体」として「未決性」の内に開示する対話篇において、知の現出をいわばその外部から測定するのではなく、知の内部より共に遂行するロゴスのあり方は、善のあり方および知の合意（Verständigung）のあり方そのものをめぐって、弁証法的倫理学の理念を体現するものなのである⁸。

こうした点に関して、『ピレボス解釈』における自らの仕事をあらためて補填しつつ敷衍した「プラトンの書かれざる弁証法」（Platos ungeschriebene Dialektik）において、ガダマーは次のように述べる。「哲学の対象とはしかし、経験科学の対象のようにとは与えられず、その対象を思考しつつ実現しようと試みる際、常に初めて、新たに構築される」（Gadamer [1968] 1985: 132 [強調は筆者]）。こうした発言において注目されるのは、ガダマーが、近代科学の発展および哲学における主観・客観図式といった近代的思考の枠組みによって、加速度的に進行していった技術的・実用主義的な世界観に対して、なおもプラトンの・対話的（弁証法的）な倫理学の可能性を保

持している点である⁹。つまり、ガダマーが見る限り、『ピレボス』における倫理学とは、自然科学が素朴に指定するような客観的对象を真理認識の要件として容認せず、今一度〈対象〉と〈対象についての思考〉との関係性の内に留まることで、思考それ自体をこの関係性ともども学知の内に掬い上げることを目的としている。このような理解のもとガダマーは、プラトンの弁証法的倫理学の意義を、そこにおいて知とロゴスの渾然一体の関係性そのものが合意のあり方として現出される点に見定め、さらにその現出の方途・技術としての哲学的対話^{ディアレクティケー}〔弁証法〕(διαλεκτική)の具体的な分析へと進んでいく。弁証法的倫理学にとって、知——さらに言えば、善——とは、知——および善——を思考するロゴスとの関係性そのものであって、その関係性もまた、他ならぬこのロゴスによる思考の内にとともに体現されるものでなければならない。

2. 『ピレボス』のディアレクティケーにおける〈関係〉としてのロゴス

こうした理解のもと、プラトンの対話篇の内でも『ピレボス』は、知とロゴスの関係性そのものを現出させるディアレクティケーを示すという点で、ガダマーにとって極めて重要な関心を占めている。「快樂」と「思惟」の対立的関係の究明——どちらがより善と同一であるかという問題の究明——を議論の主軸としつつ、「一」と「多」、「限定 (das Begrenzte)」と「無限定 (das Unbegrenzte)」といった二項区分を止揚する哲学的対話^{ディアレクティケー}〔弁証法〕を通じて「善」の本質への道筋を描く『ピレボス』において、ガダマーは分有^{メテクシス} (μέτεξις) 問題——多くの事物が一つの形相を分有するという問題——に対する自らの解釈上の立場を表明している。『パイドロス』によってはじめて導入され、『ソピステス』および『ポリティコス』でその豊富な事例が与えられる総合^{シュナゴーゲー} (συναγωγή) と分割^{ディアレイシス} (διάλυσις) を具体的な手続きとして内包するディアレクティケーは、『ピレボス』においては「言表における一と多の問題」の浮上を受けて、特筆すべき仕方でも導入されている。この点に関してガダマーは、プラトンの思考を一貫して規定してきたが、初期対話篇から『ピレボス』をはじめとする後期対話篇に至るまで必ずしも一義的な意味において用いてこれられなかつ

たディアレクティケーの導入の意義を、次の点に見定める。すなわち、それは「無限ナルモノトトノ中間ニアルモノ (μεταξὺ τοῦ ἀπείρου τε καὶ τοῦ ἐνός)」(Plato 1967: 16E=2005: 18; Gadamer [1968] 1985: 139) としての「〈混合〉の存在様式 (die Seinsweise von >Mischung<)」(Gadamer [1931] 1999: 94) の導出である。

プラトンの初期対話篇である『ゴルギアス』の快樂主義批判とは異なり、『ピレボス』におけるディアレクティケーの導入の基本線は、議論の枠組みとして四つの「類」(Gattung) —— 「快樂」, 「知性」, (両者の) 「混合」, (混合の) 「生成と原因」 —— への分割を描くことにあり、またその力点は、それらのうちで快樂と知性の「混合」を善との連関のもとに導出することにあった。『ピレボス』においては、初期対話篇より問題となっていた「感覚知覚における相対性の問題」が、善の認識における一性 (Einheit) と二性 (Zweiheit) —— および多性 (Vielheit) —— の二項的な対立区分の図式の枠を越えて、四つの類への分割をもって「別なる問題」へと変えられることで¹⁰、善の認識とロゴスによる認識との同質性 (Kongenialität) が指し示される。ガダマーがこうしたディアレクティケーの遂行において主張するのは、それ自体 (一として) 「一」なるものではなく、また「多」なる方向へと分散されるものでもなく、むしろ「一にして多なるもの／多にして一なるもの」(Vielheit von Einheit / Einheit von Vielheit) としての両者の「混合」、および「中間」である善の存在様式が、それ自体「言表」および「ロゴスの本質を表明する概念」であるという点である (Gadamer [1963] 1985: 143)。

ある事柄についての言表とは、もちろんその事柄そのものとは異なるものである。だが、それは事柄とまったく無関係という訳ではなく、事柄との特定の関係を保ちながらそれを指し示すといった点で——それが適切な仕方であれ、ときには不適切な仕方であっても——、事柄は常に関係の内に開かれている。ガダマーが「混合」・「中間」としてロゴスと呼んでいるのは、言表におけるこの「関係」(Relation) そのものに他ならない。ガダマーが見る限り、ロゴスとは、一なるアイデアとそれとは別なるアイデアとが「共に—あること (Mit-Sein)」, ないしは「まとまって—そこに—あること (Zusammen-Da-Sein)」として現出する「関係」(Gadamer [1963] 1985: 148) なのである¹¹。〈まとまって (zusammen)〉とは、言表において

一なるものも多なるものも、〈そこに (da)〉関係として〈存在する (sein)〉ということである。善の認識を関係の開示性とみなすこうしたロゴスの存在論的解釈に基づき、ガダマーはプラトンのディアレクティケーによる善の現出をロゴスによる存在の現出として理解する。このように理解することによって、ガダマーはロゴスによる人間の認識の被制約性を、むしろそこにおいて認識がはじめて可能となるところの不可避の地平として、肯定的な意味において捉え直す¹²。すなわち、感性的事象とは異なる「善」といった非感性的な「一」が認識において問題となる際、それが感性との多様な関係において感覚され、語られる場合には「多」なるものとして言表されざるを得ないのは、ロゴスによる認識のいかなる否定的な制約をも意味するものではない。ガダマーが見る限り、むしろ弁証法的倫理学にとって肝要であるのは、そうした事態こそが、人間の認識が知に対して開かれていること (Offenheit [未決性]) に対する積極的な証左であるという点に他ならない。

したがって、こうした弁証法的倫理学にとって、善を「一」なる絶対的なアイデアとして措定し、そこへと到達せんとするいかなる理論的な思索や、善の認識へと到達するために人間の認識上の立場を全知全能である神のそれに置き換えようとするいかなる態度もまた、ロゴスと存在との本来的な関係性を忘却した不当な思考形態と見なされる。それは、近代科学による〈技術〉や〈方法〉の支配的な発展がそこに由来し、「感性」と「知性」、「主観」と「客観」といった近代的な哲学の図式がそこに呪縛されてきたところの〈プラトニズムの負の遺産〉¹³なのである。こうした近代的思考における知の支配的な枠組みに対して、なおもガダマーがプラトンの〈対話篇〉の内に見出すのは、知とロゴスの本来的な関係の内に現出する善の存在様式であり、その現出そのものを実現する人間存在の思考の存在様式なのである。

3. 結語

善およびアイデアを、〈中間〉として、つまり〈関係〉として知の現出の内にもともに遂行する弁証法的思考は、それが人間の思考の本

質的な非完全性を知の現出の構造そのものの内に内包させることによって、人間の有限的・歴史的存在をも知の全体性の内に汲み上げている点で、注目に値する。というのも、ガダマーはいわば〈知的直観〉のように一挙に（uno intuit [一望ノウチニ]）全体を把握する知の形態ではなく、常に一にして多なる方向に分節化しつつ全体を把握する知の形態を、それ自体人間自身に自らの有限性を自覚させる契機として知の全体性の内に構造化しているからである。対象についての知が、同時に対象を思考する者自身についての知を内包するといった、こうした知をめぐる〈経験〉の循環構造は、後に『真理と方法』において「解釈学的経験」として定式化される〈理解〉の理論の祖型をなしていると言えよう。というのも、こうした自己理解・規定の深化を常に孕むプラトンの弁証法の理論は、それが対象についての知の規定とそれを思考する思考自体の遂行の規定とを不可分なものとして循環的に関わらせる点で、哲学的解釈学の根底を流れる理論と共通の特徴をもつと言えるからである。そしてその際、知の循環構造自体を存在論的に普遍化するためには、知の全体性を開示するロゴスの思弁的運動性が常に不可欠な契機として前提されていたに違いない。

このようにガダマーは、近代的思考の凝り固まった図式を批判的に捉え、近代科学における技術的〈方法〉の支配的な発展に対して、それを「精神科学」において——さらには哲学において——解体しつつ〈真理〉の内に再構築する術を、既にプラトンの倫理学から学んでいた。本来的な知の現出を客観的な対象化作用の内に固定化させることなく、善とロゴスの本来的な流動性の内に知の全体性の現出を見出すガダマーの倫理学は、後に自らの哲学的解釈学において遂行される弁証法哲学の復権の動向を萌芽の如く孕みつつも、プラトンの哲学的解釈という先行的地平によって裏打ちされていたのである。

【注】

- 1 ガダマーが1929年にハイデガー（さらに古典文献学者であるフリートレンダー（Paul Friedländer, 1882-1968）ら）のもとで執筆し、提出された教授資格論文は『プラトンの弁証法的倫理学——ピレボスの現象学的解釈』である。なお、この論文は、第一版から第三版に至るまでの「序言」をそれぞれ付録として『ガダマー全

- 集』では第五巻に収録されている。本発表では、テキストは原則として全集版から引用した。
- 2 とりわけ彼の60歳誕生記念論文集は、彼のギリシャ思想の解釈者としての業績のために捧げられている。
 - 3 ガダマーは *Hegels Dialektik. Fünf hermeneutische Studien* の「序言」において、若い頃に既にニコライ・ハルトマンによって、さらに後にはハイデガーによってヘーゲル論理学と直面することになった、と記している。またガダマーは「古代弁証法とヘーゲル弁証法とを相互に関係づけ、その両者を相互に対照しながら解明すること」(Gadamer 1971: 5)、こうした課題を数十年にもわたり自らの主要な哲学的関心として持ち続けたと述べている。なお、この課題に対するガダマーの具体的な論究に関しては、Hegel und die antike Dialektik (Gadamer [1961] 1987: 5-28) を参照。
 - 4 なお、ガダマーは教授資格を「哲学」で取るか、「古典文献学」で取るか当時相当迷っていたようであるが、ハイデガーの強い勧めもあり、哲学の教授資格を取得した(丸山 1997: 20-1)。
 - 5 『ナトルブ報告』とも呼ばれるこのハイデガーの草稿は、ハイデガーのマルブルク大学招聘の下地となったものであり、またガダマーがハイデガーのもとで学ぶことを決心する機縁となったものである。当時ナトルブから手渡された原稿を読んだガダマーは、「まったくもって早すぎた自信は完全にぐらつき」、「(その原稿に)私はすぐさま呪縛されたようだった」(Gadamer 1977: 24)とその衝撃の大きさを語っている。またこの草稿は、執筆後70年近くを経て『ディルタイ年鑑』第六号(1989)において掲載されることとなり、その「序文」を寄せたガダマーは、「このテキストは、私にとってそれこそ靈感を含む啓示となった。……この草稿のなかで私が見出した数々の示唆は、その後、ハイデガーの哲学生成の過程のなかでも決定的な歳月となる彼のマルブルク時代にも、私の心を離れることはなかった」(Gadamer [1989] 2003: 77) とも語っている。
 - 6 初版は本文および注1に示した通り1931年であるが、論文の提出は正確には28年、教授資格の取得は翌29年のことである。
 - 7 しばしばガダマーは、対話的形式をもって表現されるプラトンの思想を「間接的伝承」という言葉を用いて説明する。発表者が見る限り、このindirektという表現は、他にも「間接的」、「非直接的」、さらには「媒介的」を意味するunmittelbarという語と極めて親和的に用いられている。ここで「間接的」とは、時間的隔たりとしての間接性ではなく、表現そのものが言葉の媒介によって構成されるという対話上の形式そのものを指すものと考えられる。「哲学は、その対象の構築を共に考慮に入れつつ、みずから遂行することによってのみ理解されるとするならば、我々は間接的伝承に——私がこのような比喻を用いてもよいとすれば——生き生きとした肉体をまとわせ、このガタガタ音を立てる骸骨をいわば豊満なものにするという理想的な目的を、ソクラテスの対話(技)術という既知のものから追求しなければならぬ」(Gadamer [1968] 1985: 132)。
 - 8 「対話における事柄に即した合意は、知へと向けられている。その合意の理念は、合意の遂行様式と同じくして、知の理念および学問の理念に端を発し、それはギリシャの哲学が培ってきたものである。そうして出来上がった形式において認識されなければならないのは、その理念の発生の生産的な契機が意味するところのものであり、したがって対話的なもの(das Dialogische)がその発生の内に意味するところのものである」(Gadamer [1931] 1999: 15)。
 - 9 この点に関しては、ほかに Über die Möglichkeit einer philosophischen Ethik (Gadamer [1963] 1985: 175f.) も参照。
 - 10 「初期に定式化されたような分有の問題は、『ピレボス』においては] 解決され

るのではなく、別なる問題として変えられているのであり、そうして変えられたものとして解決されるのである。つまり、——『パルメニデス』においては純粋概念より証明され、言語という滑り落ちる詭弁をもって証明されるのだが——そこで『ピレボス』において証明されるのは、ひとつのイデアという一性とは、それ自身のもとで諸々のイデアという多性を把握することができる、という点である」(Gadamer [1931] 1999: 71)。

- 11 「〈人間それ自体〉とか、〈善それ自体〉といった、こうした一性とは、そこにおいて諸事物の多性がまとまって (zusammen) 見て取られ、把握されるところの諸々の関係 (Hinsicht [観点]) なのである」(Gadamer [1931] 1999: 84)。
- 12 「一性とはまさにこうした一性として対話すること (διαλέγεσθαι) 一般の可能性の条件である。一性がそうした関係である限りにおいてのみ、人はそうして見て取られた存在するものについて合意を得ることができるのである」(Gadamer [1931] 1999: 84)。
- 13 後年の論考においてガダマーは、とりわけ近代的な思考図式に基づく認識論を批判的に捉えた上で、その元凶を次のように述べている。「プラトンにまで遡る感性的また知的直観の対立、言い換えれば、感性 (Aisthesis) と思惟 (Noesis) の対立、これはプラトニズムにおける負の遺産を思い出させ、——意識的にせよ、またそうでなくても——これは近代の思考の上に存するのである」(Gadamer [1982] 1993: 191)。

〔文献〕

- Cesare, Donatella Di, 2000, „Zwischen Onoma und Logos: Platon, Gadamer und die dialektische Bewegung der Sprache“, *Hermeneutische Wege: Hans-Georg Gadamer zum Hundersten*, hrg. Günter Figar, Jean Grondin und Dennis J. Schmidt, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 107-28.
- Gadamer, Hans-Georg, [1931] 1999, „Platos dialektische Ethik: Phänomenologische Interpretation zum Philebos“, *Gesammelte Werke 5: Griechische Philosophie I*, Tübingen: J. B. C. Mohr (Paul Siebeck), 3-163 (=1931, *Platos dialektische Ethik: Phänomenologische Interpretation zum Philebos*, Leipzig: Felix Meiner Verlag).
- , [1961] 1987, „Hegel und die antike Dialektik“, *Gesammelte Werke 3: Neuere Philosophie I*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 5-28.
- , [1963] 1985, „Über die Möglichkeit einer philosophischen Ethik“, *Gesammelte Werke 4: Neuere Philosophie II*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 175-88.
- , [1968] 1985, „Platos ungeschriebene Dialektik“, *Gesammelte Werke 6: Griechische Philosophie II*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 129-53.
- , 1971, *Hegles Dialektik. Fünf hermeneutische Studien*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- , 1977, *Philosophische Lehrjahre. Eine Rückschau*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- , [1982] 1993, „Anschauung und Anschaulichkeit“, *Gesammelte Werke 8: Ästhetik und Poetik I Kunst als Aussage*, Tübingen: J. B. C. Mohr (Paul Siebeck), 189-205.
- , [1989] 2003, „Heideggers ‚theologische‘ Jugendschrift“, M. Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles*, hrg. Günter Neumann, Stuttgart: Philipp Reclam jun., 76-86.
- Heidegger, Martin, [1922] 2003, *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles*,

- herg. Günter Neumann, Stuttgart: Philipp Reclam jun (=2005, *Gesamtausgabe*, Bd. 62; *Phänomenologische Interpretation ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zu Ontologie und Logik*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann).
- , [1927] 2001, *Sein und Zeit*, 7. Aufl., Tübingen: Max Niemeyer Verlag (=1977, *Gesamtausgabe*, Bd. 2, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann).
- Henrich, Dieter, Schulz, Walter, Volkmann-Schluck, Karl-Heinz (herg.), 1960, *Die Gegenwart der Griechen im neueren Denken: Festschrift für Hans-Georg Gadamer zum 60. Geburtstag*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Plato, 1967, *Platonis Opera*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Ioannes Burnet, tomus II, New York: Oxford University Press, 11-67. (=2005, 山田道夫訳『ピレボス』京都大学学術出版会.)
- 佐々木一也, 2008, 「ガダマーの哲学・コミュニケーションを拓くものとしての解釈学」千田義光ほか編『ハイデッガーと現代ドイツ哲学』理想社, 167-93.
- 丸山高司, 1997, 『ガダマー——地平融合』講談社.

質疑

コメンテーター 小平さんのご発表は、ガダマーの教授資格論文を取り上げて、プラトンの『ピレボス』のガダマーによる解釈から彼の弁証法的な思考、そして後に展開していく哲学的解釈学の理解の理論への一つの道筋を見事に描き出したものだと思います。

私が刺激を受けたのは、プラトンの『ピレボス』の非常に特徴的な性格、すなわち初期プラトンに見られたアイデアという一元性が柔軟になり、『ピレボス』のような後期対話編になると、「知る」とことと「知られること」との間のある種の緊張関係にかなり意識を傾けていくようになることにガダマーが着目して、それを彼独自の解釈学の展開につなげていったということを、幾つかのキーワードによって明確に描き出していることです。

とりわけ重要な点は、例えば「善の認識における一性 (Einheit) と二性 (Zweiheit) —— および多性 (Vielheit) —— の二項的な対立区分の図式の枠を越えて、四つの類への分割をもつて「別なる問題」へと変えられる」という、小平さんがまとめておられるガダマーの戦略です。端的に言ってしまえば、快楽と思考とのどちらが上なのかということをプラトンの『ピレボス』では展開しているわけですが、結局その軍配が上がっていくのは両者の混合だということです。それは恐らく知と快楽とが融合した状態です。そこにおいてこそ、かつてプラトンが一元的に語った「善のアイデア」が成立するという

わけです。そこで、1個のアイデアで全てが解決するわけではなく、むしろさまざまな知と快の混合状態、融合的経験という多様なあり様の中で善が成立してくるという点に、ガダマーは注目したのでしょう。それを小平さんがうまくまとめているのが「善の認識を関係の開示性とみなす」という表現です。つまり善の認識は、何か一個の善いことが分かり、それを多様なところに配分することで成立するのでなく、多様な人間と物との、あるいは人と人との関係性の中にこそ現れてくるのだということだということです。

私が関心を持つのは、小平さんが未決性というものを非常に強調しておられる点です。これはガダマー自身も強調しているところなのですが、これについて質問いたします。

第一に、小平さんが最初に解釈の未決性に触れているのは「間接的伝承」について説明しておられるところで、〈対話編〉というのは「間接的伝承」であるとおっしゃっています。そこでは文学的・文字的な〈対話編〉が間接的伝承であって、それが解釈の未決性を成立させているという趣旨でした。ここで伝承が間接的であるということは、伝承が文字になっているということ、言い換えれば、文字化されているからそれは媒介されているという理解でよろしいのでしょうか。文字化と未決性はどういう関係にあるのでしょうか。

第二に、通常我々は解釈するときにはテキストに直接向かい合っていると思っておりまして、そこに間接性があるという発想は持ちません。間接性を介して理解しているとき、読む側の私たちの主体性はガダマーの後の発展した哲学的解釈学で一体どういうふうに考えられているのでしょうか。その点をお聞きしたいです。

第三に、ロゴスの運動そのものをともに経験することで弁証的倫理学についてもおっしゃられていますね。先ほど善の認識は多様な関係の開示の中で行われると言われましたが、これは倫理性を持つこととどのようにつながるのでしょうか。未決性にも関係していると思われますが、多様な関係の中で認識される善のあり方からすれば、ここで言われる倫理学あるいは倫理性は一体どのように考えたらよいのか。

以上の三点をお伺いします。

発表者 まず第一点目からお答えいたします。文字化されている、文学的であるというのは、文字であること自体よりも対話的な会話

の形式において表現されている文学のようなもの、つまりプラトンの〈対話編〉を指して、それにガダマーは未決性があると言っているのです。実際には対話形式でない表現の著作テキストのほうが圧倒的に多いのですが、ガダマーは「間接的伝承」のように「間接」という表現を使う場合には、対話形式を伴っていて、議論の流れが対話者によって臨機応変に変わっていくその全体を指して言っています。

誤解を恐れずに表現すれば、一人の目線で書いていない対話形式のテキストにおいて作品が持っているものを間接的という形容詞で説明しています。そのような作品には、一義的に決定され得ない未決性が際立って問題になる事態があると思います。一人の目線で書かれる普通の直接的なテキストとは違うと思います。

第二に、テキストと向き合う主体の身分はどうなるのかという点です。テキストと向き合う主体は直接的経験をしていると思われるかもしれませんが、その主体性はそれほど強くも無条件でもありません。これは『ピレボス』を問題にしている若いガダマーの立場だけでなく、後期の主著である『真理と方法』でも打ち出されており、その立場を援用して答えるのであれば、テキストと向き合っている主体は、その時点で常に、過去からのテキストに積み重なった時間や歴史、伝統を引き受けていて、さらには様々な解釈なども参照しているはずで、テキストの中から直接的に自己の責任で「主体的に」読み取っているとは必ずしも言えません。既にいろいろなフィルターを通して主体自身が他からが形成されてしまっているのです。テキストを読む主体自身の身分が真っさらではないのです。テキストの真っさらな解釈は事実上不可能であり、主体は既に何らかしらのバイアスを持ってテキストと向き合うしかない。だからガダマーにとってはテキストの直接的解釈はあり得ず、間接的としか言えないのです。

特に文学のような芸術的テキストでは特に直接性が問題になると思います。つまり読んで作品に感動するのは極めて直接的であるように思われます。それは電化製品の取り扱い説明書テキストを読んで理解するのは全く違った経験です。しかしガダマーから考えれば、文学であってもその感動には前提とする多くのテキスト知見があるはずで、主体の身分は間接的なものであると私は考えます。

最後に第三点です。ロゴスをともに経験することの意味として、そのときのガダマーにおける倫理性とは何かというような問いでしたね。ガダマーの『ピレボス論』の倫理学においては、対象なり知と、その知を思考する人間の思考との関係性そのものを「学知のうちに救い上げることが目的としている」という言い方をしていますが、この学知の知とは、言うなれば合意の理念のようなものです。つまり我々が何かについて合意を得たり、何かを認識したり、ないしは何かを理解するということは、客観的に想定されるような対象を把握したり、ないしは対象の客観性を獲得するということではないのです。何かを理解するとか、何かを認識するということは、その何かに対して認識が、認識そのものが自己と対象の関係のうちに開いてくることです。「未決性」と「開いていること」は同じような意味で、実はドイツ語では同じ言葉を私がその都度文脈に応じて訳し変えたものですが、「開かれていること」自体が、ガダマーの倫理観を支えていると言うと強すぎると思いますが、少なくとも『ピレボス論』における倫理観はそういうふうになっているわけです。

このように言いますと、結局決定できないのか、実利的な選択は何ものなされないのか、といった失望を呼びそうです。しかし、ガダマーは今ここで実利的決断をするための方策を示そうとしているわけではありません。例えばガダマーはデリダと論争したのですが、その際問題になったのは、対話可能性なり、対話不可能性の問題だったのです。ガダマーはどんな他者でも対話可能だと考えていて、それは歴史的な連続性によって支えられている、その限りで対話は可能だと考えていました。他方、デリダからすればそもそも歴史に連続性などなく、むしろ歴史は断絶していたりして、そこにあるのは差異だけであり、ガダマーの理論では、対話不可能な相手に対して何ら有効な手立てを持ち得ないというような反論がなされたわけです。ここではその反論に答えることによって、ガダマーのここでの倫理観をある程度提示できるのではないかと思います。

あまりに具体的な例かもしれませんが、今国際情勢において問題になっている日本と北朝鮮の関係を考えてみます。日本は北朝鮮に対してどういう態度を取るべきか、対話を模索すべきか、対話不可能な相手だから軍事行動に踏み切るべきか、前者はガダマーの立場

で後者はデリダの立場でしょうか。必ずしもそうではありません。ガダマーは対話不可能であるということ自体が既に対話のうちに入っていると考えます。なぜならば、対話不可能であるのは対話可能であることが前提でそれが否定されることで、対話不可能となっているからです。対話不可能いしは対話不可能であると性急に判断するのではなく、基底にある対話可能性の上に、現実の対話可能性と対話不可能性がともに開かれている状態をガダマーは『ピレボス論』では描き出したかったのではないか。ただ、結果的に軍事行動になった場合の倫理観をガダマーがどのように言うのかは微妙な問題ですが、少なくとも軍事行動がとられたとしても、それは対話不可能な相手と対話した結果によって導出された弁証法の帰結だと言えるわけです。それは「客観的な」決定でなく、対話不可能性の対話のプロセスで、弁証法的に決定された出来事と言えます。

解釈学は現実的な問題に対してはメタな次元に立っている部分もあって、結果自体がその導出の解釈学的プロセスの内に包摂されます。私の見るところ、解釈学理論は脱構築理論をも包摂していると思います。未決で開かれていることの倫理的意味は、そういうことなのです。

コメンテーター ありがとうございます。非常に的確なお答えだと思います。私の理解も小平さんに副うものです。ガダマーが対話をモデルに知の構造を取り出したことは、この場での小平さんと私の対話がここで終わることなく、その後も引き継がれてゆくという意味での未決性をはらんでいるということです。

主体の身分ということで、考えられているのは、私は真っさらでテキストと直面していなかったということ。私が小平さんとお話することは、自分にわからない部分が生じてきて自分のバイアスに気づかされる過程でもあったということを意味していると言ってよいと思います。日本と北朝鮮との関係を議論すること自体が、その場を開くこと自体がある種の倫理性を持つ、と小平さんはおっしゃったのだと思います。それをさらに歴史の次元へと発展させていったのが、ガダマーの解釈学だ、それがプラトンにもあった発想だった、というふうに言えるのかなと思います。

フロアA 「それを『精神科学』において——さらには哲学において——解体しつつ〈真理〉の内に再構築する術を、既にプラトン

の倫理学から学んでいた」。ここの〈真理〉とはロゴス的でポジティブな形で提示される真理ではなくて、思考のプラクティスの中から開示されるようなという、そういう真理ですね。

発表者：その通りです。

フロアB 「ガダマーはいわば〈知的直観〉のように一挙に全体を把握する知の形態ではなく、常に一にして多なる方向に分節化しつつ全体を把握する知の形態を、それ自体人間自身に自らの有限性を自覚させる契機として知の全体性の内に構造化しているからである」。この「常に一にして多なる方向」のご説明をお願いします。

発表者 ガダマーが「一にして多なるもの」「多にして一なるもの」と言うときは、感覚、知覚の相対性と関係があります。そもそも対話、弁証法には付随してくる問題です。例えば、善のように感覚的に感じ取れないものを言葉にして人に伝えたりするときとか、あるいは感じ取っているつもりになっているときには別のものになってしまうことがありますよね。一つしかない何かを言葉で表現するとそれを聞く人は多様に受け取るわけです。それがガダマーの言うロゴスで、それ自体が一にして多なるものなのだと彼は書いています。